The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東日本大震災と、津波と、私的経験と
Author(s)	佐藤, 眞一
Citation	生老病死の行動科学. 2011, 16, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻 頭 言

東日本大震災と、津波と、私的経験と

The Tohoku-Pacific Ocean Earthquake, Tsunami, my personal experiences, and ...

佐　藤　眞　一

あの大震災から１年が過ぎました。1996 年から大阪大学に赴任する 2009 年までの 14 年間、留学していた１年間を除いて、私は岩手県大船渡市にある特別養護老人ホーム「富美岡荘」と盲養護老人ホーム「祥風苑」に、ほぼ毎月通っていました。施設職員との事例カンファレンスを行うためでした。当時、東京に住んでいた私は、片道５時間、往復 10 時間の道のりを、新幹線と自動車を乗り継いで通っていました。昨年の震災後、定宿にしていた大船渡駅近くのホテル周辺が津波で跡形もない状態になっている様子をテレビにしがみついて凝視していたことを、つい昨日のように思い出します。

幸いにも、私が通っていた施設は高台にあったため、被災は免れました。しかし、数多くの被災者を受け入れて、約 200 名の定員の施設に、一時は 500 名ほどの入所者と被災者とで、あふれかえっていたそうです。

たびたびテレビにも取り上げられた 80 歳を超える女性施設長山崎シゲ院長（現法人会長）は、入所する高齢者や被災者のための必要品の購入を瞬時に決めていったと職員が話してくれました。職員もどんなに力強く思ったことでしょう。

昨年６月にようやく施設を訪れることができた私を、シゲ院長は温かく迎えてくれました。被災した入所高齢者と職員を励ますために訪れた緊張感一杯の私でしたが、その笑顔に逆に癒されてしまいました。何という懐の広さなのでしょう。このような人がいてくれることで、多くの人々がどれほど安心できたことでしょうか。非常時のリーダーシップがどれほど大切なことか、改めて実感しました。

少し長くなりますが、その施設のためにかつて私がしたためた文章を紹介します。

「大船渡湾を一望できる高台に高齢者の施設を建てる。これが山崎シゲ院長の大きな夢である。施設数の規定や補助金交付の原則などに関する制約から、現実には、シゲ院長のこの夢の実現は困難になってきてはいる。しかし、高齢者の幸せを願うその思いは、養子に迎えた山崎（村上）和彦氏に確かに受け継がれた。

ここ岩手県大船渡市を中心とする地域では、すべての人々が海と共に生きている。それは、必ずしも生活の糧を得るという意味だけではない。サンマ、ウニ、アワビなど三陸の豊かな海の恵みを友人知人に贈答する際のお国自慢。リアスに入り組むその地形の素晴らしさを学校の教科書に見つけたときの誇らしさ。そして､幼い頃の水遊び。ここに暮らすすべての人々の心の奥深くに、三陸の海はある。その象徴のような大船渡湾に昇る朝日と共に一日が始ま

り、湾を出入りする大小の船を眺め、そして夏にはいか釣り船の漁り火を見つめながら懐かしい過去を振り返る。そんな人生の締めくくりをしたいものだ。シゲ院長はそう考えて、数年前に大船渡湾を見下ろす高台に自宅を新築した。

新築したその家に暮らすようになってから、「この海と共に人生を送ってきたお年寄りたちにもこの海を毎日見てもらいたい。この海を見ながら人生の最後の日々を過ごしてもらいたい」という気持ちばかりが募ってきた。だから、シゲ院長から大船渡湾を一望できる地に新しい施設を建設したいという話を聞いたとき、私は、新たな施設建築を決断する際の最も重要な要因としてこのような一途な思いを第一に据えるところに、シゲ院長の原点を見た気がした。これは、福祉事業者としての原点ではない。山崎シゲという人物の原点である。大いなる母のごとく、すべての人を包み込む温かさが、そこにはある。

私のシゲ院長との出会いは、私が富美岡荘で、「ちょうじゅ」という介護データをコンピュータ処理するシステムを用いて、より効果的な介護法を施設内に確立するためのコンサルテーションとスーパーバイズを行うことになったのがきっかけであった。厚生労働省の補助金を受けて「ちょうじゅ」システムの特別養護老人ホームへの導入に関する研究を終えた私のところに、当時、安田火災長寿ライフサポートでこの研究会のとりまとめをしてくださった竹村通矩氏から「調査対象のひとつである大船渡の富美岡荘の施設長と事務局長に会って欲しい」との電話があった。1996 年（平成 8 年）の正月が過ぎたばかりの頃である。

どのような話なのかと多少のとまどいの中で、竹村氏を挟んでシゲ院長と村上事務局長とお会いした。そこでシゲ院長から「できることなら、月に一度、富美岡荘にお出でいただき、『ちょうじゅ』を有効に使う方法を指導していただきたい」との依頼を受けた。

当時、私は、井上勝也筑波大学教授を代表とする老年行動科学研究会（現・日本老年行動科学会）で、施設における介護困難事例を分析し、問題点を把握して、その解決に向けてケアプランを作成するための手法の開発に取り組んでいた。「ちょうじゅ」プロジェクトも、私自身はその研究の一環として捉えていた。したがって、「ちょうじゅ」と「パーソナルケア」と名づけた全人的ケア実現の手法を結びつけることのできる施設へのコンサルテーションとスーパーバイズは魅力的な応用の場であった。

「富美岡荘に来て欲しい」という申し出は、そのようなことを考えていた矢先でもあったので、「ちょうじゅ」がどのように介護に活かされているのかを見極め、そこに「パーソナルケア」の手法を導入することで、どれだけの改善がもたれされるかを検証するには絶好の機会ではあった。

しかし、私の住む東京から大船渡へは、新幹線と車で約 5 時間かかる。往復で 10 時間である。月に一度とはいえ、その距離と時間に私は尻込みをした。わずかな躊躇の表情を見せた私に、シゲ院長は「とにかく、一度、大船渡に来てみていただけませんか。海は綺麗だし、海の幸は抱負だし、本当に良いところですよ」と言葉を続けた。その絶妙のタイミングに、私は、富美岡荘訪問を受諾したのである。

今思うに、シゲ院長の会話は極めて巧みである。コミュニケーションとは、一見、相互の情報交換が目的であると考えられがちである。しかし、人々の日常会話を心理学的に分析し

てみると、客観的に有用な情報交換の量はわずかであり、嬉しい、楽しい、悲しいなどの感情の共有化を内容とする会話が圧倒的に多いということがわかる。シゲ院長はそのことを知っている。シゲ院長の会話は、まさしく、人における会話の核心を捉えている。

毎日の研究生活に没頭することで、かえって閉塞感に陥っていた私は、シゲ院長の笑顔と大船渡の海に誘われて、思わず、「とりあえず、一度、伺わせていただきます」と答えていたのである。

それから現在までの８年５ヶ月、途中２ヶ月に一度に減らした時期があったり、私のドイツでの研究生活のために長期に中断するなどということがあったりしたが、それ以外はほぼ毎月一度、回数にして約 70 回に及んだ私の一泊二日の「大船渡行き」が始まった。移動時間だけでも通算 700 時間である。

しかし、いつしかこの「大船渡行き」を私は楽しみにするようになっていた。乾いた砂が水を吸い込むように、私の手法が職員間にみるみる吸収されていくのである。そして、それによって職員の介護に対する目の色が変わっていくことも、はっきり実感できたからである。だが、それ以上に、私は、シゲ院長に会うことを楽しみにしていたに違いない。シゲ院長は、私が遠路を来たことの慰労を忘れない。何回通っていても、である。そして、その言葉に続けて必ず冗談を言うのである。その時に、にっこり微笑む様子を私は忘れることができない。私を迎えてくれた車が富美岡荘に近づくたびに、私は心地よい気持ちになったものである。

後に養子縁組をして山崎姓を継ぐことになる村上和彦事務局長は、こうしたシゲ院長の温かさと情け深さに助けられ、そして他者の人生を支えることの価値を徹底的に教え込まれた人物である。

いったんは東京の大学に入学した村上氏は、目標喪失によって「逃げるように戻ってきた」（本人談）という。夢が破れ、憔悴しきっていた村上氏を用務員として雇い、福祉の仕事に導いたのが、山崎伊一郎・シゲ夫妻だったのである。

長年、二人に仕えることで、村上氏は自分も高齢者福祉に人生をかけることを決断した。しかし、福祉も事業であるから、金はかかる。良い施設にしようと努力すればするほど金はかかるのである。事務局長として法人の会計を預かるようになってから、その思いは村上氏の胸にどんどんとたまっていったのであろう。村上氏は、施設経営の近代化を考えていた。そして、シゲ院長に教わった福祉の心とその方法をより多くの高齢者に捧げたいと思うようになったのである。当時注目されていたユニット形式による新たなる施設をいち早く仙台に建築し、自ら施設長となることを決断した。折しも介護保険が始まろうとしていた。福祉も近代的経営方法によって、利益をもたらす可能性が出てきたのである。

新たに借金を背負うことになるシゲ院長を、村上氏は自分が支えたくなった。いや、自分が支えるべきだと確信したのである。先代・伊一郎氏の意志は、息子の一郎氏が継いでいる。『シゲ院長の福祉の心は自分が継ごう』村上氏はそう思ったに違いない。間もなく、村上氏はシゲ院長との養子縁組を願い出る。借金と共に、富美岡荘とその法人である成仁会を受け継ぐために、である。そして、山崎和彦が誕生した。

このような人物の現れたことが、シゲ院長の人生を象徴している。人間としての価値をた

たえ、ここまで自分に惚れぬいてくれる人物が人生の中で現れる人はそうはいない。シゲ院長は何とも幸せな人である。

そして、シゲ院長の夢である。シゲ院長の自宅からさらに大船渡湾の入り口に近い、より高台で湾側に瘤のように突き出た絶好の地が手に入ることになった。かつて天皇陛下も宿泊されたという名門ホテルの跡地というだけあって、この大船渡の地にあっても最高の眺めが保障される場所といえるであろう。和彦氏が、シゲ院長の夢を実現するために必死になって捜した末の、その努力が結実した土地である。

だが、シゲ院長の夢を実現するには大きな障害が存在していた。大船渡地域では、すでに特別養護老人ホームのベッドは予定数に達している。ということは、新規に施設をオープンすることはできない、ということである。改築をする代わりに富美岡荘を海の見える新しい場所に新築するとしたら、富美岡荘があるからこそ整備された「福祉の里」はどうなるのだろうか。今の施設も残し、新たな施設も建てるのでは、定員を両施設に振り分けることになるので、経営が立ち行かなくなる。

やがて、この心配は現実のものとなってしまう。国や県そして市の諸々の方針から、市街地ではないこの土地に施設を建設するための補助金を受けることができなくなったのである。

ところが、この夢は形を替えて実現することになる。和彦氏が拠点とする仙台市では、ほぼ最終とも思われる施設建設への補助金が交付されることになった。これにシゲ院長の夢を賭けてみよう。そう思いたったのか、和彦氏は仙台の奥座敷といわれる秋保温泉に土地を買ってしまう。まだ、補助金が受けられるかどうかの見込みさえ立っていない時期である。

『景色の素晴らしいこの地で、お年寄りたちに毎日ゆったりと温泉につかって欲しい。ご家族も温泉地を訪れる楽しみの気持ちと共に面会に来ることができる。』

この気持ちだけで、仙台の杜の里福祉会を構成する法人役員会に議案を通してしまったのである。法人の役員たちも、シゲ院長やその志を受け継ぐ和彦園長の高齢者福祉への思いを知っている。理屈や計算を軽々と超越してしまうこの「思い」に、時に危うさを感じながらも、安全に、確実に進められる可能性を精査して、彼らの夢を現実にしていくことが自分たちの仕事だと信じているのである。そしてそれは、先代・山崎伊一郎氏の高齢者医療・福祉に賭けた「思い」でもあることを誰もが知っているのである。

大船渡湾を望む土地を探していたときも同じだった。補助金が受けられる可能性はどう考えても高くはなかった。このことは、土地を捜す前からわかっていたことである。それでも、夢を実現するために、土地を先に手に入れてしまおうとするのが富美岡荘のやり方であり、シゲ院長のやり方なのである。

『建てられる見込みが立ってからでは、良い土地は無くなってしまう。今そこに土地があるのだから買ってしまえ。建築できるかどうかは、これから関係者にお願いしていけばいい。』

何という楽観主義。何という頼もしさ。この明るさと頼もしさが、母のような温かさと同居しているのが山崎シゲという人物である。

幸いにもこのときは、土地を購入する前に補助金交付の可能性のないことがわかり、シゲ

院長は新たな借金を背負い込むことはなかったのだが、楽観主義には結果がついてくるものである。富美岡荘へのコンピュータの導入も、杜の里のユニット形式による建築も、結局、世の中はその方向に向かって行った。今回は、和彦園長が補助金交付前に買ってしまった土地に補助金が交付されることになり、『大船渡湾を一望できる施設』というシゲ院長の夢は、『温泉にゆったりとつかり、家族も訪れることを楽しみにできる施設』に形を替えて実現することになった。2006 年（平成 18 年）に無事完成したのである。

しかし、実は、私はシゲ院長の夢をまだ諦めてはいない。シゲ院長も密かに抱き続けているはずである。『海の見える施設』。この夢の実現を、私も楽観的に待つことにしたい。」（佐藤眞一監修 (2004)『富岡荘物語』中央法規出版を一部改変）

大船渡湾を臨む高台にあったシゲ院長の自宅は、地震のために住むことはできなくなってしまいました。設立から 35 年近く経つ施設は、この震災を期に立て替えを予定しているとのことです。しかし、もはや大船渡湾の近くに新しい施設を建設することはできません。また、山崎和彦氏が設立した仙台の海岸に近い施設は 1 階が完全に津波にのみ込まれてしまい、高台に新たな建設場所を探しているとのことです。

一瞬にしてすべての命運を変えてしまう自然の力に無力感を感じざるを得ないのですが、しかし一方で、高齢であるか若年であるかにかかわらず、未来を見つめる人間の力の頼もしさも実感することができました。これからの復興を見続けてゆくことだけが私たちにできることなのだと、震災後 1 年目の 3 月 11 日に東京で東日本大震災に関する学会のシンポジウムに出席していた私は改めて考えていました。

富美岡荘で私の行っていたカンファレンスも 98 回で止まったままです。必ずや再開して 100 回目を迎え、シゲ院長や職員の皆さんと三陸の幸を前にして祝杯を挙げることのできる日を、私は待ち続けることにしました。

関西に住む私たちは、こうして今年も無事に『生老病死の行動科学』を発行することができました。このことがどれほど幸せで、有り難いことなのか、阪神淡路大震災を経験したにもかかわらず忘れがちだったこのことを、再び思い出しているこの頃です。

「生老病死の行動科学」第 16 巻をお届けします。インターネット上での公開もしていますので、そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫（OUKA）http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/LASD/index.html

また、本分野のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生学・老年行動学分野ホームページ　http://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/